

ヘルマン・ヘッセ

『ペーター・カーメンツィント』について

——遍歴の起点——

磯 弘 治

On *Peter Camenzind* : Where Peter's Wandering Begins

ISO Koji

Abstract : Hermann Hesse's 'Bildungsroman' *Peter Camenzind* is characterized by wandering. As far as the hero's childhood and his hometown Nimikon, from which he departs, are concerned, this novel does not always trace directly Hesse's own experiences. The rural scene of Nimikon surrounded by Alpine nature, however, reflects German farm villages which saw a wave of industrialization around the turn of the century, and the description of Peter hides the dilemmas the author lived out. The conflict between Peter and his parents tells us about various aspects of Hesse's own adolescent crisis.

1901年1月末、ベルリンのザムエル・フィッシャーはヘッセに宛てて、『ヘルマン・ラウシャー』に寄せる好意ある言葉とともに、新しい作品を要請する。ヘッセはこれに応えるかたちで、5月はじめに『ペーター・カーメンツィント』の草稿を送った¹⁾。「この原稿を読んだうえで、フィッシャーは、6月にいちはやく以後5年間に書かれる作品の先買権についての契約をヘッセと結ぶ」が、しかし「フィッシャーがヘッセの本はきっと当ると思っていたわけではなさそうである。『ペーター・カーメンツィント』の出版に際して、フィッシャーは、この本は大当りすることはないでしょうが、かといって初版だけで終ることもないでしょう、と無難な言葉を作者に書き送り、500部分の印税を前払いしただけだった²⁾ようだ。1903年9月、11月、雑誌 *Neue Rundschau* に掲載された『ペーター・カーメンツィント』は、1904年2月15日初版3,000部が刊行され、同年7月には4版、5版、1905年には17版を数えた。出版早々に版を重ねる反響は³⁾、フィッシャー社のみならず、すでにバーゼルの書店を退職し、またマリア・ベルヌリと婚約した(1903年5月31日)が、かならずしも将来の確かな展望をもっていたわけではないヘッセにとっても、思いがけ

ぬほどのものであった。やがて「2年間で36,000部、5年間で50,000部⁴⁾という大きな成果を实らせる『ペーター・カーメンツィント』は、作家としての知名度はもちろんのこと、あわせて当面の経済的安定をもたらすものであった。

(1)

いくつかの二次文献から作者ヘッセ、あるいは小説『ペーター・カーメンツィント』についての記述を拾ってみる。

Ch. I. Schneider はヘルマン・ヘッセとトーマス・マン、それぞれの苦悩の経験と叙述の異同について、「なによりも、マンは問題に対してははじめから冷静に距離をおいて、鋭く知的に解明し、そして *Selbstironie* によって克服した」と見なし、その一方で「ヘッセにとっては、自分を度外視することや、あるいは、言ってみれば遊戯的に技巧という媒介をとおして、前もって実際に経験し、また場合によっては最後まで悩む必要のなかったような答えをみつけだすことが、あきらかに困難であった」と対比し、「ヘッセの場合、とりわけかれの作品の多くに際立った特徴としての自伝的

構成がそれを証言している』と述べている。

Joseph Mileck は、「ヘッセの作品は最初からきわめて個人的な色彩をおびていたし、それが変わることはなかった」と、詩人としての私的属性を挙げ、「主人公と作者とは概して不可分である。ヘッセの作品の多くは物質的世界との相互作用をほとんど排除して、かれの内的な自己を投影させている。わずかな作品だけが内的状況と外的状況を反映している。『ペーター・カーメンツイント』は後者に属している。カーメンツイントの懸念な試み、失望と幻滅、かれの資質と傾向、さまざまな困難とそれを解決しようとする努力は、全体としてヘッセのそれである。わずかな差異にこだわらなければカーメンツイントの閥歴はヘッセと同じである』と断じている。

ヘッセと深い友誼を結び、経済的支援を受けることもあった Hugo Ball は、ヘッセの伝記のなかで、「カーメンツイントはまったくおもしろおかしく読めるほら吹き小説でもある」と、小説『カーメンツイント』の別の一面を指摘している。「さかんに自慢話やほら話が吹聴されている。もしもカルフの家であればもつての外であるような仕方、よどみなく気ままにそんな話が語られている。ときには大笑いしながらシェルフスキーを思い出さずにはいられない。[……] (カーメンツイントは) いかにも『うそ物語』らしい『うそ物語』である。自分の才能を遺憾なく発揮するという言葉があるが、ちょうどそんなふう、われわれがよく知っているかつての牧師職志願者が、この本のなかでは洗いざらいこころのうちを語ろうとし、語る事が許されてもいる、と言えるだろう。[……] つくり話の楽しみはあまりにも長い間おさえつけられていた。カーメンツイントの楽しい自慢話や遠くへの旅などは、アウエルバッハの地下酒場を、そしてミュンヒハウゼンを想わせる。暢気で屈託ない昔ながらの手法は、ルキアノスの摩訶不思議な話からドン・キホーテ、ジル・ブラスを経て、まさにこのカーメンツイントにまでつづいている』と、Ball はペーターの物語のなかに、ヘッセの何かを払拭したような心境、諧謔に託した覚悟を読もうとしているようだ。

Fritz Böttger は『カーメンツイント』をヘッセの「現実の生活への道を踏みだす確乎とした一步を意味している」ものと捉えて、「同時代の若者たちは、もちろんこの本のなかにひとつの芸術家小説というよりは、むしろちょうど若者たち自身のように、市民生活の秩序に順応する術をこころえていないひとりの青春期の揺れ動くヴァガボンドの物語を見た。若者たちに

とってカーメンツイントは、ひとりの異議を唱える若者の姿であり、かれらはそのなかに自分自身を見いだした」と、ヘッセの作品を受け入れた読者の心情をおしはかり、青年運動など時代の傾向への共感を示唆しながら、「カーメンツイントの意識には、漠然としたロマンティックな気分があり、質素な生活や、ルソー的な単純であることへの傾斜がある」と、世紀転換期の世相の反映を指摘している⁸。

ちなみに、ヘッセは『ペーター・カーメンツイント』を書き上げると、フィッシャーに宛てて、「私のささやかな作品が近代的ではなく、それどころか反近代的であると、一目でお判りになるでしょう。形式についてもいろいろ欠点があるとは思いますが。反対にひとごとや田舎は時間をかけた念入りの観察にもとづいて描かれており、そこには創作されたものや体験されなかったものは、何一つとしてありません。力点は変わり者であるペーターの精神的成長にあるのです、それゆえ、そのほかはすべてスケッチふうにと扱われています。言葉については流行には同調せず、むしろ、何よりもわたしの個人的な気持ちに従って、まったく私の故郷 (わたしは半ばバーゼル人であり半ばシュヴァーベン人です) で話されているドイツ語に倣いました』と書き送っている。

以上の記述からは、小説『ペーター・カーメンツイント』の基本的な輪郭、あるいは性格が浮かんでくるのではないだろうか。

(2)

いわゆる *Bildungsroman* としての『ペーター・カーメンツイント』に綴られた生の軌跡は、さまざまなモチーフに彩られている。生の軌跡は遍歴であり、遍歴は故郷であるアルプスの山間の村ニミコン¹⁰を起点としている。村人たちのこまやかな日常を明らかにする説明はないが、「われわれの村はそれほど外部からの新鮮な血や生命が補給されず [……]、住民のほとんどがみんなきわめて近い姻戚関係であり、四分の三以上はカーメンツイント姓をもつ」(S.346)、あるいは「ただしわれわれの暮らしのうえを、隠れた、あるいは自覚されない陰鬱さの晴れることのない靄が覆っていた。自然の力にたよる、労多い生活の惨めさが、時が経つにつれ、いずれは老い朽ちるわれわれ一族に憂鬱の質をうえつけた」(S.346)といった記述が故郷の暮らしぶりをうかがわせる。しかし、それにもかかわらず、アルプスの自然にへばりついたような山間の

村の描写には、どこか「純朴さ」「のどかさ」に通じる空気を想起させるものがあり、屈託にまみれていないひとびとと、その生活の健全さを匂わせる牧歌的たたくまいがある。

1871年のプロイセン国王ヴィルヘルム I 世の皇帝即位によりドイツ帝国が成立する。ペーターの故郷として設定された農村をイメージするてがかりに、この帝国成立から 20 世紀初頭あたりまでのドイツの社会的あるいは経済的事情を概観してみたい。1873 年に始まるいわゆる経済恐慌のなかで「保護関税政策」、また急速に進む工業化が生む労働者運動に対する「社会主義者鎮圧法」が実施され、バルカン問題で対立する列強をベルリン会議（1878 年）で調停、またロシア、オーストリア、イタリアと結んでフランスに対抗するなど帝国を主導してきた初代首相ビスマルクも、1890 年解任される。やがて、ヴィルヘルム II 世の帝国主義的膨張政策はイギリスとの対立を生むとともに、緊張したヨーロッパにおける大国間の均衡を危うくさせ、次第にヨーロッパ全土を巻き込んだ深刻な事態をもたらすこととなる¹¹⁾。

ドイツ帝国における工業と農業の推移はいちじるしく、そして社会の様相も激しく変化する。19 世紀末から第一次世界大戦にいたる時期、いわゆる工業化の波が押し寄せるとともに、ドイツの社会構造はいっきに工業社会のそれに移行する。1870 年にドイツの工業・手工業の生産高の割合は 26% であったが、1913 年には 41% にまで増大する。先進諸国と比べても、1893 年にはイギリスの半分程度であった工業生産高が、1913 年にはアメリカに次いで世界第二位を占めるまでに伸びてゆく。この時期、ドイツ帝国の総人口は 4,100 万から 7,000 万に増えているが、工業人口の変化を見てみると、1882 年 35%、1895 年 39%、1907 年 42% と上昇しており、工業化の速度はあきらかである。工業生産のめざましい躍進に引張られるように、国民所得も 1871 年 140 億 2,000 マルクから 1913 年 480 億 5,000 マルクへと大きく伸びている。農業生産も工業化の恩恵を受けてか、主要穀物の 1 ヘクタール当りの生産高が 70% から 90% への上昇がみられ、ドイツ国民の生活水準を引き上げてはいる。しかし、帝国成立以降 500 万から 900 万と倍増した工業人口と比べ、1882 年に 42% を占めていた農業人口は 1895 年 35%、1907 年 28% と急激に減少し、自動車をはじめとする新たな交通手段の開発実用化によるヨーロッパの穀物市場の構造的変化も加わって、ドイツは農作物の輸出国から輸入国へと転換する。1871 年には 600

万であった農林業関係の就業人口は、1913 年には 500 万に減じた。また、1882 年から 1907 年の 25 年間で、就業人口に占める賃金労働者の割合は 42% から 49% に増加し、1907 年当時、就業人口の約半数が賃金労働者に属するひとびとであった。農業人口の変化を見てみると、1882 年の農業人口は 42% を数えたが、1895 年には 35%、1907 年になると 28% と減少している。経済の焦点が工業へ移行した結果、必然的に人口の流動化と人口分布の変動、ひとびとの移動と都市化現象が生じる。1871 年には農村に暮らすひとびとは 2,600 万余と総人口の三分の二を占めていたが、第一次大戦前には都市人口が 3900 万となり、また、帝国成立後の 40 年間で 88 市だった人口 10 万人以上の大都市も 48 市と増加している¹²⁾。

(3)

農業国から工業国への移行、工業化の波におしやられ衰退してゆく農業の様相は、そのまま先に示したペーターの故郷ニミコンのひとびととその生活に置き換えてもよいかもしい。故郷ニミコンの陰翳はそのまま農業と農村の陰画ではあるだろう。しかし、『ペーター・カーメンツイント』は帰郷する物語であり、遍歴にはさまれた滞在や逗留も故郷をいたづらに忌避するものではない。Ernst Bloch は、農村にまわりつく陰翳と農民のある種の頑なさを、「農民は自分が属する場所から移りたがらない。農民は自分の土くれの上で、その上だけで自由であろうとし、土くれを所有したときには、いっそうかたくなにそこに固執した。[……] 平安はわずかな関係の中にあっし、そして、ともかくも見渡したかぎりでの最良のわずかな関係とは、少しばかりの自分の所有する土地との関係であった。農民はその関係をもったとき自己を解放されたと感じ、大半はそれ以上、少なくとも新しい状態は要求しなかった。[……] つまり農民は、自分がすでに具現しているものへ向かって自己を解放することのためにだけ行動した。農民は自らを、それまでの階級をうち破ることによってはじめて形成される新しい階級とは決して感じなかった」¹³⁾と説明している。アルプスに覆われたニミコンの村人たちの視野狭窄は、周囲をとりまく世界との親和性であり、彼らの罪ではないのだろう。センチメンタルな自己憐憫はむしろ自己疎外を意味することになり、自由と平安は彼らが日々仰ぎ畏怖するアルプスの稜線に護られてこそである。むしろ、いわゆる自由とか平和とか友愛は、耕す

土をもたない、それは四季から成り立つ生活をもたないという意味で、自然がもつ秩序としての大きな循環から離脱したひとびとの安直な共同性の原理にすぎないのかもしれない。ニミコンのひとびとに収益、利益率、減価償却、貸借対照表などはおそらく無縁であろうし、そんなせちがらい価値判断基準もないだろう。有能とか無能ではなく、実直に自然の摂理に抗うことなく、日の出に耕し、日暮れて憩う愚直な精励さを美德とする営みの安寧を維持することが、彼らの日常にほかならない。また、Bloch は農民がこの頑迷な、しかし実直な精励のゆえに授かる幸運を、「どんなに過度の労苦があっても毎日を戸外で生活することは健康であり、過度の労苦といっても少なくとも神経には障らないだろう。[……] 大地への信頼、規則正しい四季への信頼はいまなお信頼を残しているという意味において、結局は健康なのであり、暦を伴った生活もそうなのである。この健康さは、[……] 自然の振り子に合ったもの、つまり農民の生活や活動を暦どおりにさせるものに結びつけられてもいる。あるいは、スイス・ドイツ語の農民方言のすぐれて比喩的な表現をつかえば、農民の昔の生き方である『つり合い』に結びつけられている。この『つり合い』とは、天秤が平衡状態にあるか、あるいはまさしくデーメーテルの振り子にあっていれば、農民を、負債、苦業、抑圧、生活の糧の耕作中におこるさまざまな障害から解放するものなのである」¹⁴と祝福し、同時に「だが、もちろん『つり合い』はまた、通常の分別のあるという意味をはなれ [……]、存在を大地と仲違いさせないということ、獲得した大地での生活をあらゆる進んだ『時代精神』に逆らって反動的に呪縛し離さないということ、でもある。田舎では、この真正直な分別とこのいまだに呪縛的な静止状態とが今日なお奇妙に共存している」¹⁵と、その愚直さゆえに彼らが抱える旧弊も示唆している。この健康が、ニミコンのたたずまいに「牧歌的な」、「長閑な」、「暢気な」といった印象をあたえるのだろう。種を播き、苗を育て、肥料をやる作業は村人のその土地への信頼への証であり、見返りとしての収穫は、かれらをその土地への固定へとつながす。「四季への信頼」あるいは「暦をともなった生活」とは、かれらの農耕という単調ではあるが、決して弛緩をゆるさず献身を強いる生活現実が生む経験則に他ならない。この経験則はニミコンのひとびとの習わしとしきたり、道徳と善悪観、美意識と憧れまでも形成しただろう。ペーターが感じる「暮しを覆う晴れることのない靄」と「憂鬱の質」は、農民社会の存在を大

地と仲違いさせるものに対する不寛容と、この経験則の埒外にあるものに眼を背ける姿勢の比喩なのかもしれない。この「健康」は、人間に授けられる形而上的な救済や福音ではなく、むしろ人間が願う形而下的な幸いの一つの姿なのだろう。ただヘッセは、農村としてのニミコンの営みを直截に記述するかわりに、アルプスの自然を擬人的に記述することで、小さなニミコンの大地と共生するひとびとの生を肯定し、ペーターの眼に映る自然のエネルギーな生命力を幻想的に憑依させて描写することで、生がもつ可能性の継続を示しているように思われる。「アルプスの岩山は不屈の老兵士のように誇らしげに」(S.344)、あるいは「山の木々は隠者や戦士にも思え」(S.344)、また「少年らしい奔放さが、育つにつれ、わたしは、反逆者、永遠の青年、ふてぶてしい戦士、そして春をもたらす南風を愛した」(S.350)。「これらすべてが、決して人間の口の端にのぼったことのない神の言葉を、高らかにありのまま語るからである」(S.351)と、ペーターのこころと風景との内的な感応が、自然と共生する神々への畏れとその存在を称えているようだ。ペーターの「自然」への偏愛に対して、「街」とりわけ「大都市」にまつわる記述は、きわめて批判的である。さほど有名ではなかったヘッセをフィッシャーにとりもったパウル・イルクに宛てた手紙(1903年1月29日)で、ヘッセは「耽美主義者」「形式主義者」などの自分にたいする批評家の的外れとあわせて、「ペーター・カーメンツイント」とかさなる自分を書き記している。「私が知っている都会のうちでもっとも良い見本となるものでも、歴史的な理解と純粋な自然感覚という点で、典型的な欠如をしめしています。この二つの感覚を、私のほんのちいさな幸福はたよりにしているのです。[……] 私の永遠の、そしてかなえられることのない願いは、無職の人間として、たとえ質素ではあっても、まったく依存せずに暮らすことです。——そうならば私はイタリアの辺鄙な山里で一生を過ごし、遠大な徒歩旅行をし、現代生活のくだらぬものから、すっかりそしてのんびり離れているのを感じることでしょう」¹⁶。この手紙は、『ペーター・カーメンツイント』が書き始められる直前のものだが、ヘッセの言う「都会」、あるいは「現代生活のくだらぬもの」とは具体的に何を示唆しているのか明瞭ではない。ただ、『カーメンツイント』を書いていたころ、ヘッセは国際的な都会の賑わいぶりについては、遠回しにバーゼルの自由放縦さと呼べるような、ごく一端しか知らなかった」¹⁷と Ball も指摘しているが、『ペーター

ー・カーメンツィント』では、大都市パリが、「とりわけパリは身の毛がよだつ」都会であり、「文学と娼婦の雑談」,「下卑た女ども,厚顔で虚栄心が強い芸術家やら作家連中」¹⁸⁾といった調子で断罪されている。この記述は後に削除されるが、「ただしベルリンやパリの都市とひとびとのありようはいささか内容に乏しく,未体験のままで欠落している」¹⁹⁾ヘッセの都会に対する,まるで言いがかりのような形容は,「ほら話」や「うそ話」のもつべきユーモアからはおよそほどとおい。

(4)

「作品の多くに際立った特徴としての自伝的構成」,「主人公と作者とは概して不可分である」,「われわれがよく知っているかつての牧師職志願者が,この本のなかでは洗いざらいこころのうちを語ろうとしている」などの先に挙げた Schneider, Mileck, Ball らの『カーメンツィント』評,そしてヘッセ自身の手紙に拠れば,ペーターは作者ヘッセが,それまでの自らの生の軌跡をなぞりながら描いた自画像と, Böttger の言う「現実の生活への道を踏みだす確乎とした一歩」としてこれからを拓く自画像をあわせもつことになるだろう。この自画像にしめされたヘッセは,アルプスの田舎育ちで頑健な肉体を持ち,粗野なほどに荒削りで初心な存在であり,際立つのは,まず自然への偏愛と人間への嫌悪とされている。それは純朴さと健康な無知に装われた,未成熟な人間がかかえる楽天主義と,自分自身への思い入れ以上に,自分でももてあますほどの意固地な自分自身の頑なな気質への戸惑いと苛立ちをないまぜにした若者の懊悩ということになる。ヘッセは刊行後間もない頃の手紙で,「ペーターの子供時代の印象の描き方が,およそ子供らしくないという非難が寄せられますが[……],このような印象を綴った物語を書いているのは成人したペーターなのです。我々ひとりひとりにとって,幼年時代はそれが本当に実際そうであった,というようなものではないのです。大人になった我々が,記憶する姿をあとからの認識と郷愁とを混ぜ合わせて理解しているものなのです」²⁰⁾と述懐している。記憶と認識と郷愁の混合はデフォルメとさまざまな意匠をこらした幼年時代,祖父も兄弟も姉妹も登場しないペーターの家を設定させている。聖書と祈りの敬虔主義やインドのエキゾチックな思い出はない。幼少年期の自画像と並んで,そこに描かれた両親の姿も仮装している。「両親はわた

しの若い情緒面での成長を促しもしなければ,妨げもしなかった。母はいつも仕事で手一杯であったし,教育の問題ほど父が関心を払わなかったものは他になかった。せいぜい,二三本の果樹をなんとか育て,ジャガイモ畑を耕し,乾草を見るだけであった」(S.352)。飼っている羊もわずかであろう暮らしが,父ヨハネスと母マリーの家のつつましさを感じせるが,それ以上の宗教的あるいは知的ななにかを想わせるものではないだろう。さらに,「母親からは僅かばかりの世才と信仰心,静かで口数の少ない気質を,父親からは反対に揺るがぬ決心への恐れ,金銭管理能力の乏しさ,あれこれ考えながら大酒を飲むこと」(S.359)という記述を,『カーメンツィント』の20年後の述懐とくらべると,ペーターの父と母に着せられた衣は,まるで血縁への疎ましさのようにも思えてくる。「自分の気質のある部分を,わたしは父から受け継いでいる。なにものにも制約されずにあることへの欲求や,懐疑的,批判的,自己批判的性格,とりわけことばで表現する際の正確さに対する感覚,といったものである」²¹⁾。「母からは気質の情熱的な部分,ゆたかで,いくらか刺激的なものを好む想像力,さらには音楽の資質,を受け継いでいる。音楽とことばとに,わたしは子どものころから親密な関係をもっていた。絶対なるものへの,神的超時間的秩序へ直に参入することへのあこがれという意味で,また宗教や思索に対しても同様であった」²²⁾。母の気質である情熱と鋭敏な感受性は小賢しくも伶俐でもない,ありふれたつつましい世渡りの術に,父のありのままの自由は節操のない大酒に,慎重で抑制の効いた振る舞いは優柔不断に,誠実な表現は無知な気前のよい性分に,意匠を変えデフォルメされている。

ヘッセの母マリーが,6歳児のヘッセに,「大体のところは,ありがたいことに,まったく手が掛からず聞き分けがよい」²³⁾と,ほっとしているのにたいして,「月や星を観察し,オルガンを即興で弾き,[……]みごとなスケッチを描く,歌を唄えば韻はずすことはない」と,幼いヘッセの早熟ぶりに戸惑う父ヨハネスには,「あの子をどこかの施設か,よそのお宅に預かってもらうのがよいのではと,真面目に考えている。私たちはあの子に対してあまりに神経質で弱すぎる。それに家庭そのものも,十分に躰がゆきとどき規則正しいというわけではない」²⁴⁾と,戸惑い以上のどこか投遣りな気配すら感じられる。息子ヘッセへの懸念と焦慮は,思春期にあったヘッセのマウルプ

ロンの神学校脱走以降の、摸索というよりはあがき、両親の世界への反発と抵抗を予見しているが、『ペーター・カーメンツィント』には、やはりヘッセの思春期の心情と行動はリアルに反映されていない。

山と湖と嵐と太陽を、そしてなにより雲を友としたペーターは10歳ではじめてアルプスの頂に登る。自然を友とするとは、想像と空想のいわば魔術的な力を借りて、現前していないなにかを顕在化し具現化するだけでなく、さらに、自分を未知のもの、遙かなもの、異質のものへ投企することなのだろう。Ballは「喜ばしいものや美しい輝きそして陽光への傾斜は、さしあたりまだひとつの仮装である。その弱点をかくすために[……]ヘッセは山育ちのカーメンツィントのなかで、都会的な礼儀作法とは無縁の牧童を細部まで忠実に演じる」としているが²⁵、韜晦がはらむものは、成人したヘッセが自らの幼年期の天真爛漫な早熟さを懐かしむ想いだろう。山頂からの眺望は、「10年のあいだ山と湖にはさまれ、周囲は間近の峰々が群がるように押し寄せるなかで暮らした者は、はじめて頭上に広大な空がひろがり、目の前に限りなく地平線が横たわっていた日のことを忘れはしない」(S.355-356)と、幼いペーターに剥き出しの空間の広がりを教え、そして空間の広がりはかれの精神、あるいは魂とよばれるものに、未来や希望さらにあこがれとよばれる思考の方向としての新たな広がりを教える。少年のペーターはアルプスの空に漂う雲と戯れる。雲は「あらゆる放浪と、探究と願望、そして故郷を求めることの永遠の象徴」(S.354)であり、「雲が大地と空のあいだで、おずおずと、焦がれながら、頑なにかかっているように、人間の魂も時間と永遠のあいだで、おずおずと、焦がれながら、頑なにかかっている」(S.354)という比喻に、「詩人になりたい」ヘッセの幼い決意と覚悟を読み取れるかもしれないが、神学や聖職に通ずる階段を拒み、自ら降りてしまった経緯と神学校脱走後の数年間のヘッセ自身の葛藤、あるいは周囲との相剋がそのままに描かれることはない。

ペーターが故郷を離れギムナージウムでの勉学も間もなく終ろうとするあたりまでの記述には、父母と交わす会話はほとんど見あたらない。優しく繊細で、命を生み抱きしめ慈しむ理想としての母親像はともかく、日常に追い立てられ、優雅でも繊細でもなく、圧倒的な生活者としての時間を生きねばならぬ母の姿さえも描かれない。ただペーターが母の死を看取る光景に、ようやく母と子あいだにあっただろう当たり前の日常がうかがわれるだけである。

もう一度、ヘッセ自身による覚書を遡ってみる。「わたしが敬虔であったのは、しかし13歳までのことで、14歳の堅信礼のときには、もうずいぶんと懐疑的であった。やがてすぐにわたしの思いや想像はもっぱら世俗的なものとなった。両親をこころから愛し、深く尊敬してはいたが、しかし両親の生きている敬虔主義的の信仰は、なにか満たされないもの、なんとなく卑屈なもので味気ないものだとも感じていた。そして青年期になるとしばしば激しく反抗した」²⁶という記述からも、ヘッセの両親との軋轢と相剋がうかがわれる。苛立ちと怒りは、敬虔主義という宗教が体現されねばならない家、その教えと戒律に忠実であり、信仰を基盤とし、信仰がある種の権威にもなる家とその日常との対立が生んだのだろう。マウルブロン神学校を退学(14歳)の後、ヘッセの漂流はバード・ボルやシュテッテンの精神療法をする牧師の施設、カンシユタットのギムナージウムを入退学、エスリンゲンの書店員、故郷の塔時計工場の見習工、父の出版協会の手伝い、さらにテュービンゲンの書店員(18歳)とつづき、ようやくバーゼルの書店に見習期間終了者(22歳)となって漂着する。漂流するヘッセが父母に宛てた手紙には、いわば思春期の喪失感、屈折した罪悪感がそのまま剥き出しにされている。

ほくの心をいっばいにし、捉えているものは[……]、それは失われた永遠の青春へのもの哀しい苦しみ、郷愁です。しかし、カルフではなく、なにか真実のものに寄せる郷愁なのです。ほくは世間と暮らしのせわしなさ、希望や愛のなかに、ただ妄想と感情ばかりを見るのです。[……]「シュテッテンのヘルマン」をあなたがたは知りません、あなたがたの息子ではないのです。[……]ああ、ほくは忘れていました、あなたがたが違う人間だと、彫像のように非の打ちどころのない、しかし生命の宿らぬ人間だということ。あなたがたは[……]正真正銘の敬虔主義者です。あなたがたは、別な願い、意見、期待、別の理想をもち、別なものに満足をおぼえる。[……]、あなたがたはキリスト教徒です、しかしほくはひとりの人間にすぎないのです²⁷。(1892年9月11日)

信仰がなくとも祈ることはできるといった、融通無碍な祈りではないのだろう。両親との自明の親近性は消えさせている。ただ、15歳のヘッセは自分だけの

才能あるいは、生きがいという幻想に頑なにしがみつ
き、振りまわされ、ふてくされているようだ。共同規
範としての敬虔主義はまだ絶対的だが、成長という知
識のひろがりや肥大した観念が、少年を新しい空間と
地平に向かわせ、あがらせる。そして敬虔主義という
権威を信じない、ないしその権威の失墜が、いわゆる
戒律や倫理的な規範の破棄につながる。

あなたがおかしなほど犠牲を払うことを厭われな
いと、おっしゃっているのですから、ぼくはあなた
に7マルク、あるいはレボルバーをお願いして
もかまわないでしょう。ぼくをこんな捨鉢な気分
にさせたあとです、おそらくはもうぼくをこの絶
望から、そしてご自分をこのぼくからすみやかに
解放することもおできになるはずで。本当なら、
ぼくは6月にこの世から消えてなくなるべき
だったのです。[……]「父」とはおかしな言葉で
す、ぼくはこの言葉を理解できそうにありませ
ん。父という言葉は愛することのできる、そして
愛している、ほんとうに心の底から、そういうだ
れかの名称なのです。どれほどぼくはそんな人物
を望んでいることでしょうか。ぼくにご助言いた
だけないでしょうか。ぼくとあなたとの関係はいよ
いよ緊張した展開になりそうですが、もしぼくが
敬虔主義者であり人間でないとしたら、ぼくがぼ
くのすべての性質や傾向を正反対に変えるなら
ば、ぼくはあなたとうまく調和できるでしょう
が。しかしそんなふうには生きることができません
し、生きようとも思いません²⁸⁾。(1892年9月14
日)

この手紙は、父に対して *Sehr geehrter Herr* と、い
かにも奇異な呼びかけで始まり、「ぼくは、[……] だ
れが精神薄弱なのかを考えはじめています。[……]」
と、まるで捨て台詞のような言葉で終わっている。ヘ
ッセのさまざまな思いを暗示するものだろう。この年
の6月、ヘッセは自殺未遂事件をおこしているが、そ
の後入学したギムナージウムでは、「あの頃、ろくで
もない連中や札つきの上級生とつきあい、夜ともなれ
ば禁を犯して居酒屋に入り浸り、さんざん酒を飲むこ
とをおぼえた」²⁹⁾と、思うにまかせぬ現実からの逃避
や回避としてか、非行に明け暮れたようだ。鬱屈と奇
妙な活力の混合が興奮と狂乱をもたらし、憂鬱と夢
想は衝突と徒労を生むだけであった日々のなかで、少年
のヘッセにとって、事象としての死への接近、あるい

は欲求としてのタナトスはかならずしも無縁であった
わけではない。

ぼくは逃げることは出来ません、いったいどこ
へ？ ぼくにはもう嘆いたり頼んだりできるひとは
いないのです、ひとりぼっちです。ぼくが赦し
を請うことで、事態をやわらげることはできるで
しょうが、そんなことはしません。ぼくはこのシ
ュテッテンでの刑期をつとめあげました。けれど
ぼくに希望をいだかせるひとなどだれもいないの
です。[……] ぼくがあなたたちの愛を失った
まになって、はじめてぼくがあなたたちをととも
愛していることを感じています。しかしもう家
には帰りません。できないのです。あなたたちの優
しい愛についてお書きにならないでください、そ
れは言葉にすぎません、ひょっとすると祝福と祈
りかもしれません、しかしそれでもやはりそれは
幻想であり、なんの役にもたたない、無意味な
のです³⁰⁾。(1892年9月22日)

ヘッセは何よりも繋がるべき人間を見いだせないで
いる。幼い絶望や失望感の底、そしてニヒリズムの危
機から人間が立ち上がるのは繋がりによってだろう。
少年は繋がりや飢え、繋がりや生きることを望みなが
ら苦悶している。少年のヘッセは孤立無援で抜きがた
い不信と、繋がりへの切ない願いに引き裂かれ、立ち
竦み宙吊りになっている。人間がどこにも、なにもの
にも帰属するものをもてないとき、おそらく人間は確
固たる自己をもてはしないだろう。しかしまた、なに
ものか、あるいはどこかに人間が全面的に帰属し愛
着することは一種の自己喪失でもあるだろう。

「結局ペーターがどうなるのか、はどうでもよいこ
となのです。肝腎なのは彼をひとかどの人物にするこ
とではなく、彼自身の素質が生命を燃焼するなかで、
彼が可能な限り成熟してゆくことなのです」³¹⁾という
『ペーター・カーメンツィント』の稿をかさねていた
ヘッセは、ようやく確信をもって未来を待ちのぞむ希
望を見いだしたのか。後悔や諦念の季節が過ぎて、大
袈裟に言えば、世界と生に対する信頼を取り戻し、自
らと周囲の事柄をそのまま見据える意志を確かめ、抗
わずむしろ肯定的に我が身に受け入れる静かな心境に
至っているのか。「現実の生活への道を踏みだす確乎
とした一歩」が、陰翳にとんだ体験の反映が刻まれた
過去の一部を敢えて無視させたのか、それともそれが

うそ話やほら話には馴染まなかったのか。ともかく、「私にとってこの本が成功することは極めて大事です。仮に商業的には不首尾であるとしても、私の名前と文学上の信用をいくらかでも高め、日々の生活にいくらかでも安定と活力をあたえてくれれば」¹²⁾というヘッセの願いはかなえられる。

ヘッセのバーゼルへの漂着は、物語のなかのペーターのそれと重なる。二人の遍歴とその旅程については稿を改めたい。

注

* 『ペーター・カーメンツィント』のテキストは以下の全集版所収のものに拠った。Hermann Hesse: Peter Camenzind, in: Gesammelte Werke in zwölf Bänden, Bd. 1, Suhrkamp Verlag, Frankfurt a. M. 1970, S. 341–496. 引用は頁数のみを記した。訳文については関泰祐訳『青春彷徨』(岩波文庫, 1973年)を参考にした。

- 1) Hermann Hesse 1877・1977. Stationen seines Lebens, des Werkes und seiner Wirkung. Sonderausstellungen des Schiller-Nationalmuseums. Hrsg. von Bernhard Zeller. Katalog Nr. 28., 1977, S. 207.
- 2) 山口知三「市民階級の文化とともに——S・フィッシャー社と作家たち」, 山口・平田・鎌田・長橋『ナチス通りの出版社』人文書院, 1989年, 44頁。
- 3) Hermann Hesse 1877・1977, S. 207.
- 4) 山口知三「市民階級の文化とともに」, 45頁。
- 5) Christian Immo Schneider: Das Todesproblem bei Hermann Hesse, N. G. Elwert Verlag, Marburg 1973, S. 131–132.
- 6) Joseph Mileck: Hermann Hesse. Dichter, Sucher, Bekenner, C. Bertelsmann Verlag, München 1979, S. 35.
- 7) Hugo Ball: Hermann Hesse. Sein Leben und sein Werk, Suhrkamp Verlag, Frankfurt a. M. 1972, S. 102–103. シェルムフスキーはクリスティアン・ロイター (1656–1712?) による空想世界旅行記『シェルムフスキーの珍奇にして危険な旅』(1696–97)の主人公。ジル・ブラースはアラシールネ・ル・サージュ (1668–1747) によるスペイン風悪漢小説 (pikarischer Roman, Schelmenroman) 『ジル・ブラース物語』(1715–35)の主人公。
- 8) Fritz Böttger: Hermann Hesse. Leben, Werk, Zeit, Verlag der Nation, Berlin 1974, S. 108.
- 9) Sigfried Unseld: Hermann Hesse. Werk und Wirkungsgeschichte, Suhrkamp Verlag, Frankfurt a. M. 1985, S. 20.
- 10) Böttger はペーターの故郷について, 「アルプスの牧人の息子として生まれた詩人 Heinrich Leuthold は, さまざまな不自由と欠乏にもかかわらず大学で学ぶ道をかちとった。彼の場合もまた詩的な天分と才能が不幸な

運命をもたらした。イタリアへ行ったり, ボヘミアンの自由放蕩な生活やジャーナリズムの世界を経験するが, たえず孤独と資本主義社会における芸術家のいかがわしい立場に苦しんでいた。1910年ヘッセはロイトホルトの詩集を批評し, 1922年には彼の Der schwermütige Musikant の序文を書いている。彼の出生地 Witzikon が Nimikon とする村の名を思いつきかけを与えたのかもしれない』としている。Fritz Böttger: Hermann Hesse, S. 99–100.

- 11) 麻生建他編『事典現代のドイツ』(大修館書店, 2000年), 「歴史」の項(とりわけ6–7頁)参照。
- 12) このあたりの社会経済的背景の記述については, 以下の書物に多くを負っている。飯田・中村・野田・望田『ドイツ現代史——名望家政治から大衆民主主義へ』ミネルヴァ書房, 1968年。成瀬・黒川・伊東『世界現代史 20 ドイツ現代史』山川出版社, 1994年。成瀬・山田・木村編『世界歴史体系 ドイツ史 2』山川出版社, 1996年。
- 13) Ernst Bloch: Hebel, Gotthelf und bäurisches Tao (1926), in: Verfremdungen I, Suhrkamp Verlag, Frankfurt a. M. 1970, S. 186. [邦訳: エルンスト・ブロッホ「ヘーベル, ゴットヘルフ, そして農民の道」, 『異化』船戸満之他訳, 白水社, 1986年, 179頁。]
- 14) Ebd., S. 188–189. [邦訳: 180–181頁。]
- 15) Ebd., S. 188–189. [邦訳: 180–181頁。]
- 16) Hermann Hesse: Gesammelte Briefe. Erster Band 1895–1921, Suhrkamp Verlag, Frankfurt a. M. 1973, S. 93.
- 17) Hugo Ball: Hermann Hesse, S. 100.
- 18) Hermann Hesse: Peter Camenzind, S. Fischer Verlag, Berlin 1904 (Erste Auflage), S. 127.
- 19) Hugo Ball: Hermann Hesse, S. 100.
- 20) Hermann Hesse: Peter Camenzind, in: Über das eigene Werk. Gesammelte Werke in zwölf Bänden, Bd. 11, S. 24.
- 21) Hermann Hesse: Biografische Notizen, in: Eigensinn, Suhrkamp Verlag, Frankfurt a. M. 1972, S. 15.
- 22) Ebd., S. 17.
- 23) Kindheit und Jugend vor Neunzehnhundert. Hermann Hesse in Briefen und Lebenszeugnissen 1877–1895. Ausgewählt und herausgegeben von Ninon Hesse. Suhrkamp Verlag, Frankfurt a. M. 1973, S. 14.
- 24) Kindheit und Jugend vor Neunzehnhundert, S. 15.
- 25) Hugo Ball: Hermann Hesse, S. 94.
- 26) Hermann Hesse: Biografische Notizen, S. 17.
- 27) Kindheit und Jugend vor Neunzehnhundert, S. 260 ff.
- 28) Ebd., S. 268.
- 29) Hermann Hesse: Biografische Notizen, S. 19.
- 30) Kindheit und Jugend vor Neunzehnhundert, S. 271.
- 31) Hermann Hesse: Peter Camenzind, in: Über das eigene Werk. Gesammelte Werke in zwölf Bänden, Bd. 11, S. 24.
- 32) Ebd., S. 24.